

おしめ^{じん} 尽^い 遺^{せき} 跡

平成28年1月

宇都宮市教育委員会

序

おしめ尽遺跡は、宇都宮市江曾島町に所在する遺跡です。周辺には雷電山遺跡や関道遺跡など、古墳時代から奈良時代にかけての古墳や集落跡が数多くあり、おしめ尽遺跡もそのうちのひとつとして古くから知られていました。

今回、株式会社横尾材木店による宅地造成に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、事業者をはじめ、関係機関と協議の上、遺構の保存が行えない部分について、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。その結果、古墳時代後期から奈良時代の集落跡の一部が確認され、江曾島地区の古代の歴史を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、今回の発掘調査で得られたこれらの成果をまとめたものであり、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで、多大なるご理解とご協力をいただきました関係各位、関係機関に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 28 年 1 月

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫

例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市江曾島町105番1他に所在する「おしめ尽遺跡」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社横尾材木店による宅地造成に伴うもので、地権者の安野榮子・安野忠幸・池田智子氏により委託を受けた、株式会社日本窯業史研究所が宇都宮市教育委員会の指導の下に実施した。
3. 野外調査は、平成27年7月13日～同年8月8日まで行い、整理・報告書作成作業は同年12月25日まで実施した。
4. 本書の執筆は「第1章 第1節」を宇都宮市教育委員会前原義之、「第1章 第2節、第2章、第5章 第1節」は水野、他は柏崎が執筆し、「第5章 第2節」として「石製祭具 勾玉形」と題し篠原祐一氏（祭祀考古学会）より玉稿を賜り掲載した。編集は柏崎が行い、鈴木智子の協力を得た。土器の採拓は菅間智代が行った。

5. 調査組織

調査指導・宇都宮市教育委員会文化課

今平 利幸 文化課文化財保護グループ係長

前原 義之 文化課文化財保護グループ

調査主体者・株式会社日本窯業史研究所

菅間 智代 代表取締役

柏崎 広伸 調査担当者（日本考古学協会々員）

水野 順敏 調査員（日本考古学協会々員）

6. 調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。
7. 野外調査から整理・報告書作成作業において下記の機関・各位よりご助力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する次第である。

栃木県教育委員会文化財課、(税法)飯塚会計事務所(飯塚保文)、泰平地所(大武修)、(株)ダイショウ、
(株)塚田土建、(株)横尾材木店、安野榮子、安野忠幸、池田智子、篠原祐一、山下守昭

(敬称略、順不同)

8. 調査参加者

石川義夫、入江晴江、入江通子、郷間久男、篠崎安子、長谷川健二、渡辺重夫

(敬称略、順不同)

凡 例

1. 本遺跡名の略号は、U(宇都宮)E(江曾島)O(おしめ尽)=UEOとし、各遺構の略号はSI(竪穴住居跡)、SD(溝跡)、SK(土坑)、P(小穴)、PT(住居内小穴)、K(擾乱)を示す。
2. 第2図は国土地理院発行の25,000分の1地形図『宇都宮東部』『宇都宮西部』を部分複製し加筆した。
3. 押図は調査区全体図が縮尺200分の1、他の遺構実測図の縮尺は60分の1を基本とし、カマドは縮尺30分の1、遺物実測図は3分の1を基本とし、微細遺物は2分の1である。
4. 遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図・断面図の水準線の数値は、海拔標高を示す。
5. 押図の遺物番号は本文及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○-□()の前が遺構番号、カッコ内が遺物番号である。遺構図に示した遺物番号は観察表左端の番号である。
6. 遺構図で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

カマド構築材

焼土・焼面

粘土範団

土器断面の黒ベタは須恵器を示す。

7. 土層・土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄編・著 2008『新版標準土色帳30版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を使用した。

目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	7
-------------	---

第2節 調査の経過と概要	7
--------------	---

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	8
-----------	---

第2節 歴史的環境	8
-----------	---

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法	11
-----------	----

第2節 基本層序	11
----------	----

第4章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡	13
-----------	----

第2節 その他の遺構	19
------------	----

(1) 土坑	19
--------	----

(2) 溝跡	22
--------	----

(3) 小穴	22
--------	----

第5章 総括

第1節 遺構・遺物について	27
---------------	----

第2節 石製祭具 勾玉形 篠原祐一	28
-------------------	----

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表

第2表 SI- 1 出土遺物観察表

第3表 SI- 2 出土遺物観察表

第4表 SI- 3 出土遺物観察表

第5表 SI- 4 出土遺物観察表

第6表 SI- 5 出土遺物観察表

第7表 溝跡出土遺物観察表

挿図目次

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 第1図 試掘調査図 | 第7図 SI-2出土遺物 |
| 第2図 遺跡の位置と周辺遺跡 | 第8図 SI-3・出土遺物・カマド |
| 第3図 基本土層図 | 第9図 SI-4・出土遺物・カマド |
| 第4図 調査区全体図 | 第10図 SI-5・出土遺物・PT-3 |
| 第5図 SI-1・出土遺物 | 第11図 SD-1・出土遺物 |
| 第6図 SI-2・カマド・PT-4 | 第12図 SK-1・SK-4 |

図版目次

- 図版1 A. 調査区全景(東より) B. 調査区西半部全景(南より)
- 図版2 A. 調査前全景(北東より) B. SI-1南北土層(東より) C. SI-1完掘(南より) D. SI-1掘方 東西土層(南より) E. SI-1出土遺物(西より) F. SI-2南北土層(東より) G. SI-2完掘(南より) H. SI-2焼土範囲(東より)
- 図版3 A. SI-2掘方(南より) B. SI-2貯蔵穴 南北土層(西より) C. SI-2貯蔵穴完掘(西より) D. SI-2カマド東西土層(南より) E. SI-2カマド完掘(西より) F. SI-2カマド掘方(西より) G. SI-2出土遺物(西より) H. SI-2出土遺物(西より)
- 図版4 A. SI-3南北土層(東より) B. SI-3完掘(南より) C. SI-3カマド完掘(南より) D. SI-4東西土層(北より) E. SI-4南北土層(東より) F. SI-4完掘(東より) G. SI-4カマド 南北土層(東より) H. SI-4カマド完掘(南より)
- 図版5 A. SI-5完掘(南より) B. SI-5貯蔵穴 東西土層(南西より) C. SD-1土層B(北より) D. SD-1完掘(南より) E. SK-1南北土層(東より) F. SK-4完掘 東西土層(北より) G. P17完掘(東より) H. 基本土層 東西断面(北より)
- 図版6 SI-1・2出土遺物
- 図版7 SI-3~5、溝跡出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 (第1図)

平成27年4月17日付けで、株式会社横尾材木店 代表取締役 横尾守氏より宇都宮市江曾島町105番1、107番2のおしめ尽遺跡(県番号3227)内での宅地造成工事に伴い、文化財保護法第93条の申請が提出された。同日付で市教育委員会文化課から県教育委員会文化財課(以下県文化財課)へ進達し、これに対し県文化財課より確認調査が必要である旨の指示が4月27日付けであったため、事業者と協議し、確認調査を実施することとなった。

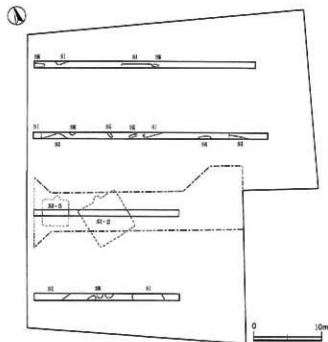
確認調査は、5月14日に実施した。調査の方法は、おしめ尽遺跡地内で宅地造成工事が予定されている場所に、T-1からT-4(長さ約21~34m、幅約1m)の4本のトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。調査の結果、10軒の堅穴住居跡が確認されたほか、土坑9基が確認された。遺構は、現地表面から約0.4m掘り下げた面で確認され、土師器片が出土していることから古代の遺構と考えられた。

この調査結果を5月15日付けで事業者側に通知し、事業者および土地所有者である安野榮子と協議した結果、工法等の事業計画の変更は難しいとの結論に至ったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査に関しては、安野榮子が費用を負担することとなり、平成27年6月30日付けで宇都宮市教育委員会教育長水越久夫と埋蔵文化財発掘調査に関する覚書の交換を行った。

発掘調査は、株式会社日本竊染史研究所が調査主体となり、現地における発掘調査および発掘調査報告書の作成を担当することとなった。

第2節 調査の経過と概要 (第4図)

平成27年7月1日、地権者との委託契約を締結する。同月13日、調査区の設定と対象地の草刈り等の準備



第1図 試掘調査図

を行い、同月19日調査着手前の写真撮影を行った。同月21日、重機による表土除去作業を行い夕刻終了する。同日は仮施設設の設置と安全対策を行った後、遺構確認作業に着手した。翌24日は測量基準点の設定と遺構調査を継続した。その後、8月3日にかけて調査・記録の作業を継続する。調査区全景写真撮影は8月5日に計画し、4日には全体の清掃作業を行った。8月5日、ローリングタワーを使用して東西双方より調査区全景写真撮影を行う。同日午後には、市教育委員会文化課と事業主に対し調査成果の説明を行い、終了確認を受ける。その後、補足調査・記録を行い、同月8日に埋め戻しと現場の撤収を行いすべての野外作業を終了した。

今次調査では、古墳時代中期~奈良時代前期に

かけての竪穴住居跡5軒、土坑2基、中世以降の溝跡1条などを確認した。道路予定地部分という制約から、調査区内に全体が所在する住居跡は無かった。出土遺物は古墳～奈良時代の土師器、須恵器、石製模造品（石製祭具）、中世の船載青磁、埴器などが出土した。

整理・報告書作成作業は、現地調査と併行して遺物の洗浄・注記作業を行い、現地調査終了後から同年12月25日まで実施した。

宇都宮市教育委員会に、調査報告書、出土遺物、調査記録類を移管し、すべての作業を終了した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第2図）

おしめ尽遺跡は、栃木県宇都宮市江曾島町105番1他に所在する。栃木県は関東平野の北端に位置し、西は群馬県、北は福島県、東と南は茨城県と接する。また、西・北・東の三方を山地に囲まれ、中央部から南で平野へと連なる。

宇都宮市は栃木県の中央部に位置し、西は鹿沼市・壬生町、北が日光市・塩谷町・さくら市、東は高根沢町・芳賀町、南は上三川町・下野市と境を接する。地域の東部を鬼怒川が南流し、中央をその支流の田川、西寄りには利根川水系思川の支流姿川が南流する。これらの河川の流域には低地が広がり、各低地と低地の間には南に向かって延びる台地がある。台地は各水系の小支谷により樹枝状に開折されており、今次調査区の東方約150mにも小支谷が見られる。

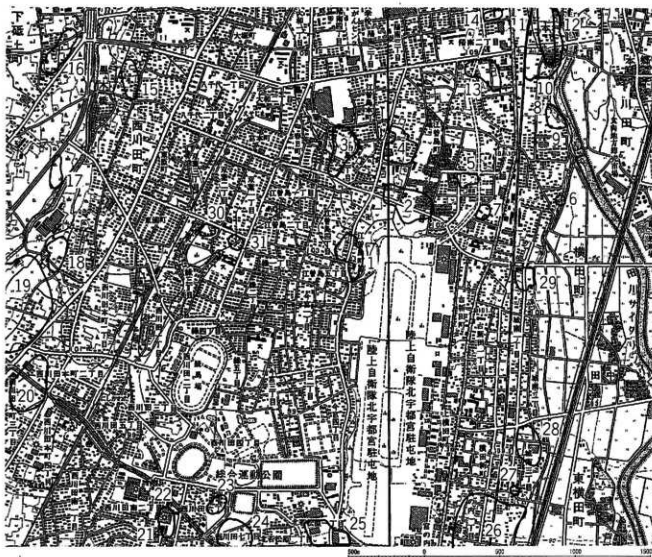
本遺跡は、姿川低地と田川低地の間に所在する宇都宮台地上に立地し、現田川まで約1.8km、姿川までは約2.7kmである。

交通的には、JR東日本宇都宮線宇都宮駅の南西方約5kmに位置し、東武宇都宮線江曾島駅の南東方約1.2kmに所在する。また、国道4号線が東方約0.9kmを南北に通る、西方約1.5kmを県道宇都宮栃木線が南北に通る。

第2節 歴史的環境（第2図、第1表）

近隣に所在する遺跡を第2図、第1表に示した。本遺跡から半径約2kmの圏内に約31ヶ所の遺跡が所在する。このうち、旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡は7ヶ所程が知られる。弥生時代の遺跡は本村遺跡（12）1ヶ所のみである。ここでは市道改良や老人福祉施設の建設に伴う調査で、後期の住居跡が20軒程調査され、十王台式の土器等が出土した。

古墳及び古墳時代の集落跡は18ヶ所知られ、このうち、古墳・古墳群は6ヶ所である。遺跡の南南西約2kmの塚山古墳群（24）は、県指定史跡の塚山古墳（全長98mの前方後円墳）を主墳とし8基の存在が知られる。塚山古墳は東谷笹塚古墳の後継的首長墓と見られている。この古墳群からは鹿の線刻のある埴輪が出土している。また、北東方約2kmの本村古墳群（11）では中期から後期の古墳が5基確認され、後期の3号墳が前方後円墳で他は円墳と見られる。2号墳の箱式石棺から乳文鏡や多数の武器などが出土、銀杏葉文線刻埴輪なども見られた。遺跡の北約500mの雷電山遺跡（3）は、かつては全長230mの巨大な前方後円墳と見られていたが、中期後葉の長方形竪穴住居跡群が確認され、石製模造品等が出土している。また、南東方約1.6kmの城南三丁目遺跡（28）では2基の古墳が確認され、1号墳の2基の木棺より乳文鏡・直刀・鹿角装の刀子などが出土した。



第2図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	県道跡番号	時代							番号	遺跡名	県道跡番号	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世				近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安
1	おしめ尻遺跡	3227				○	○	○		17	山ノ神遺跡	3208	○						
2	園道遺跡	3285				○	○	○		18	北之原遺跡	3209							○
3	雷電山遺跡	2228				○	○	○		19	西の内遺跡	3210	○						○
4	並松遺跡	3284				○	○			20	嵐の宮神社北遺跡	3212							○
5	江曾高北原遺跡	3283				○	○			21	旭マーケット前遺跡	3204	○						
6	大山稲神社古墳	3287				○	○			22	小野御器北遺跡	3254	○						
7	江曾高北原南遺跡	3286	○				○			23	塚山北遺跡	3220							○
8	台内手遺跡	3282					○	○		24	塚山古墳群	3222							○
9	台内手古墳群	3278					○	○		25	北岩松原遺跡	3226							○
10	西原坂遺跡	3281				○	○	○		26	宮の内遺跡	3291							○
11	本村古墳群	3272					○	○		27	城南3丁目南遺跡	3290							○
12	本村遺跡	3275				○	○	○		28	城南3丁目遺跡	3289							○
13	河原ヶ沼遺跡	3280					○	○		29	大湧林遺跡	3288							○
14	城南1丁目遺跡	3274					○	○		30	自動車教習所北遺跡	3229	○						
15	ヤジカ遺跡	3207					○			31	鎌ヶ丘小北遺跡	3230							○
16	並塚遺跡	3199				○													

さらに、南方2kmの北若松原遺跡(25)や若松原遺跡(図外)は塚山古墳と同時期の集落跡と見られ、多数の石製品が採集されており、その中には未成品が多く見られることから、白玉生産が行われていたと推察される。当地区においては塚山古墳群をはじめとする中期中葉以降の古墳の分布が目立ち、該期の集落跡も多く見られ、本遺跡もその一つである。

当地は、律令制下においては下野国河内郡に属していたと推察され、当郡の郡家は本遺跡の南方約6km、本市と上三川町とに跨って所在する国指定史跡上神主・茂原官衙遺跡に比定されている。また、その西隣りには評家と推定される西下谷田遺跡があり、上三川町多功遺跡も後継の郡家と推定されている。本遺跡の周辺には奈良・平安時代の遺跡が19ヶ所と全体の3分の2を占める。これらのうち、本遺跡と同様に古墳時代より継続する集落跡が10ヶ所に対し、奈良時代以降に登場する集落跡が9ヶ所とほぼ同数である。

中世遺跡はあまり多くはないが、7ヶ所程知られる。前述の雷電山遺跡は宇都宮氏の家臣江曾島氏の居城と伝えられ、江曾島城跡と呼ばれている。また、前記の本村遺跡では市道改良部分の調査で該期の集落跡が確認された。奥大道沿いの集落跡と考えられ、市内においても貴重な存在である。さらに、城南三丁目遺跡でも堀跡や方形堅穴、掘立柱建物跡などが高密度で確認されており、ここも奥大道との関係が想定されている。また、陽南1丁目遺跡(14)や宮の内遺跡(26)においても該期の遺跡が確認された。本遺跡でも僅かながら溝跡より遺物の出土があった。

近世以降は概ね畑地として利用されてきたと見られ、各種の耕作痕や作物の貯蔵穴などが認められた。

参考・引用文献

1. 宇都宮市史編さん委員会 1979『宇都宮市史』第1巻 宇都宮市
2. 赤石澤 亮 1988『関道遺跡』宇都宮市文化財調査報告第25集
3. 今平利幸 1994『雷電山遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第34集
4. 今平利幸 1996『城南3丁目遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第39集
5. 名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1996「雀宮周辺の分布調査6」『下野考古学』24 下野考古学研究会
6. 栃木県教育委員会 1997『栃木県埋蔵文化財地図』
7. 宇都宮市教育委員会 1997『宇都宮市埋蔵文化財地図』
8. 宇都宮大学考古学研究会 2003『塚山西古墳 塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集
9. 富川 努 2004『本村遺跡(弥生・古墳編)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集
10. 三輪孝幸・井 博幸・三辻利一他 2007『本村古墳群・本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第58集
11. 糸里剛・古代都市研究会編 2009『日本古代の都衙遺跡』(株)雄山閣

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

調査は重機（バックホウ・0.25 m³）を使用し、厚さ40～50 cmの表土（耕作土）を除去した後、人力により遺構確認作業を行った。

確認した遺構は、堅穴住居は十文字、土坑・小穴は半裁、溝は横断による土層の観察・記録を行った。その後、セクションベルトを除去して、完掘写真撮影・実測を行い、堅穴住居は床面を除いて掘方を追求した。再度写真撮影・実測を行う。この間、遺構の所属時期を示すと思われる遺物や特殊遺物は出土位置の記録、出土状態の写真撮影を行って取り上げた。

調査の記録（実測）に際しては、公共座標（世界測地系）を使用した10 m方眼のグリッドを設定した。南西隅を基点（A1）とし、その座標値はX = 57,990.000、Y = 3,190.000、である。X軸をアラビア数字、Y軸をアルファベットで表示する。平面図は縮尺20分の1で全面を網羅した。計測にはトータルステーションを使用し、人手で図化した。土層図、断面図も縮尺20分の1を基本とするが、カマドは縮尺10分の1で実測した。

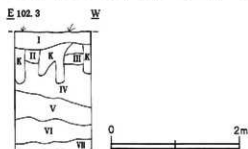
写真撮影は、35 mm判の白黒・カラースライドフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。なお、撮影に際しては、三脚及び大型脚立を使用し、全景写真はローリングタワーを用いた。

第2節 基本層序（第3図）

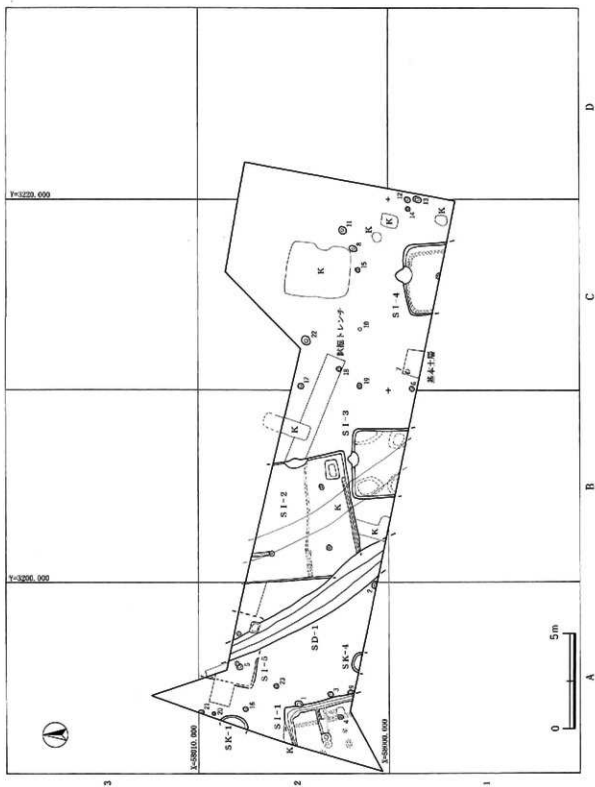
調査対象地の現況はほぼ平坦な畑地となっているが、地山面は北西から南東に向かって緩やかに下降していた。基本層序として調査区南東部における柱状土層図を第3図に示した。

基本土層

- I. 暗褐色土（10YR3/3）耕作土
- II. 黒褐色土（10YR2/2）ローム粒（1～3 mm）3%、焼土粒（1～3 mm）1%。締まり弱い
- III. 暗褐色土（10YR3/3）ローム粒（1～5 mm）3%、今市パミス（1～5 mm）1%。締まり並
- IV. 明黄褐色土（10YR6/6）今市・鹿沼パミス（1～3 mm）1%。やや軟質で粘性はなく締まりは極めて強い
- V. 黄褐色土（10YR5/6）今市パミス（1～5 mm）・鹿沼パミス（1～3 mm）1%。やや軟質で粘性はなく締まりは極めて強い
- VI. にぶい黄褐色土（10YR5/4）鹿沼パミス（1～3 mm）5%。やや軟質で粘性は弱く締まりは強い
- VII. 黄褐色土（10YR5/6）鹿沼パミス（1～10 mm）10%。やや硬質で粘性はなく締まりは極めて強い



第3図 基本土層図



第4図 調査区全体図

第4章 遺構と遺物 (第4図)

今次調査で確認した遺構は、古墳時代中期～奈良時代前期の堅穴住居5軒、時期不明の土坑2基、溝1条、小穴23基である。なお、調査区中程でSD-1に並行するように南北に延びるSD-2は、土層・形状から耕作地の根切もしくは区画溝と判断される事から調査対象から除外した。遺物は古代の土師器が主体で、畿内産の須恵器や石製模造品、中世の舶載青磁や妬器なども見られた。

第1節 堅穴住居跡

SI-1

遺構 (第5図、図版2B～E)

調査区南西のA2グリットに所在し、北東約2mにSI-5、北約2mにSK-1が隣接する。大部分は調査区外に延びる。小穴P-1・4・9に切られている。

平面形・規模は前記の状況から明確にし難いが、現存の東西長3.5m、南北長3.8mで北東隅のみの確認である事を考えると、かなり大型の住居であった事が想定される。炉跡・カマド跡は確認できず、現存する東壁から推察される主軸方位はN-9°-Wを示す。

壁は現存高40～50cmでほぼ直立する。壁下には幅30～50cm、深さ10～14cmの壁溝が設けられている。また、東壁から主柱穴(PT-2)に向かって2条の間仕切溝が設けられていた。

床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地され、堅く締まっていたが、東壁側においてのみやや乱れが見られた。

柱穴は2基(PT-1・2)隣接して確認したが、新・旧の主柱穴と考えられる。さらに、床下面の調査でも計3基(PT-3～5)を確認し、このうちPT-3に関しては更に古い時期の主柱穴と考えられ、少なくとも2回の建て替え拡張の存在が推察される。また、幅20～35cm、深さ10～14cmの旧壁溝も確認され、これによれば幅約80cmの拡張であり、床面は10cm程嵩上げしていた。

埋積土は11層に分けられ自然埋没と考えられるが、東壁寄りにおいては貼床が不明瞭で締まりも弱い事から疑問を残す。

遺物 (第5図、第2表、図版6)

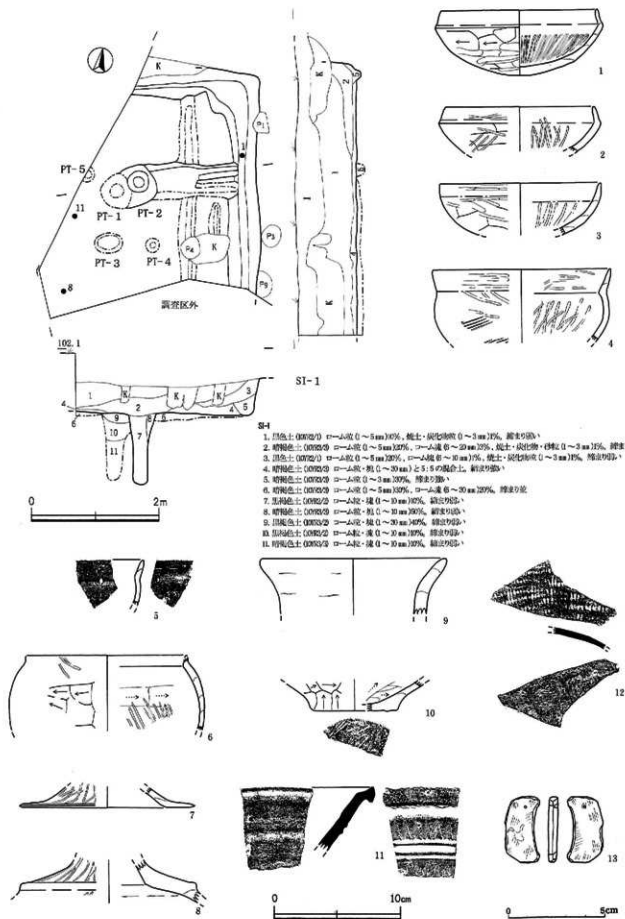
遺物は土師器の坏(2・3)、埴(4・5)、鉢(6)、高坏(7・8)、甕(9・10)や畿内産と思われる須恵器の器台(11)、甕(12)が旧床面付近より出土した。また、PT-1の底面より勾玉形の石製模造品(石製祭具)(13)が出土している。さらに、東壁際の床面よりもやや高い位置の埋積土中からは、完形に近い土師器の坏(1)が出土している。

SI-2

遺構 (第6図、図版2F～H・3A～H)

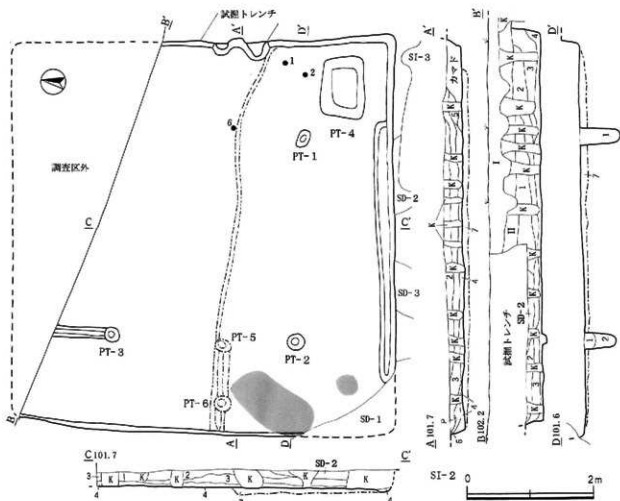
調査区中央のB2グリットに所在し、北側は調査区外に延びる。南にSI-3が隣接し、西側を南北に走るSD-1によって南西隅を切られている。

平面形・規模は前記の状況から明確にはし難いが、現存部分で東西長6.4m、推定南北長6.4mのほぼ方形と思われる。東壁の中央やや南寄りにカマドが設けられ、主軸方位はN-81°-Eを示す。



- SI-1
1. 黒色土 00002/1 □-△径 0 ~ 5 mm 10%, 横土・炭化物径 0 ~ 3 mm 1%, 雜土99%
 2. 暗褐色土 00002/2 □-△径 0 ~ 5 mm 10%, □-△横径 0 ~ 20 mm 10%, 横土・炭化物・硝子 0 ~ 3 mm 1%, 雜土99%
 3. 黒色土 00002/3 □-△径 0 ~ 5 mm 10%, □-△横径 0 ~ 10 mm 1%, 横土・炭化物径 0 ~ 3 mm 1%, 雜土99%
 4. 暗褐色土 00002/4 □-△径・横径 0 ~ 30 mm 1と5:5の割合上, 硝子入り
 5. 暗褐色土 00002/5 □-△径 0 ~ 3 mm 100%, 雜土99%
 6. 暗褐色土 00002/6 □-△径 0 ~ 5 mm 100%, □-△横径 0 ~ 30 mm 100%, 雜土99%
 7. 黒褐色土 00002/7 □-△径・横径 0 ~ 10 mm 100%, 硝子入り
 8. 暗褐色土 00002/8 □-△径・横径 0 ~ 30 mm 100%, 雜土99%
 9. 黒褐色土 00002/9 □-△径・横径 0 ~ 30 mm 100%, 雜土99%
 10. 黒褐色土 00002/10 □-△径・横径 0 ~ 10 mm 100%, 雜土99%
 11. 褐色土 00002/11 □-△径・横径 0 ~ 10 mm 100%, 雜土99%

第5図 SI-1・出土遺物



S-2

1. 赤色土 0002/0 11-A段 0~3mm 30%, 粘土粒 0~3mm 10%, 障まり跡。
2. 赤褐色土 0002/2 11-A段 0~5mm 100%, 11-A段 5~20mm 100%, 粘土粒 0~3mm 10%, 障まり跡。
3. 赤褐色土 0002/3 11-A段 0~5mm 100%, 11-A段 5~20mm 100%, 粘土粒・塊 0~10mm 10%, 障まり跡。
4. 暗褐色土 0003/3 11-A段・塊 0~40mm 100%, 粘土粒 0~3mm 10%, 障り跡。
5. 暗褐色土 0003/4 11-A段・塊 0~40mm 100%, 粘土粒 0~3mm 10%, 障り跡。
6. 暗褐色土 0003/5 粘土粒 0~5mm 100%, 障り跡。
7. 暗褐色土 0003/6 11-A段 0~5mm 100%, 11-A段 5~20mm 100%, 障り跡。

SI-2 PT-4

1. 暗褐色土 0002/3 11-A段 0~5mm 100%, 粘土粒 0~3mm 10%, 障り跡。

SI-2 PT-2

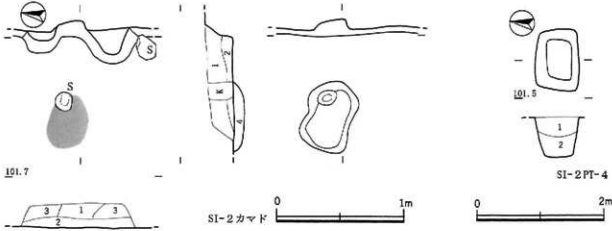
1. 暗褐色土 0002/3 11-A段 0~5mm 100%, 障り跡。
2. 赤褐色土 0002/2 11-A段 0~5mm 100%, 障り跡。

SI-2 PT-4

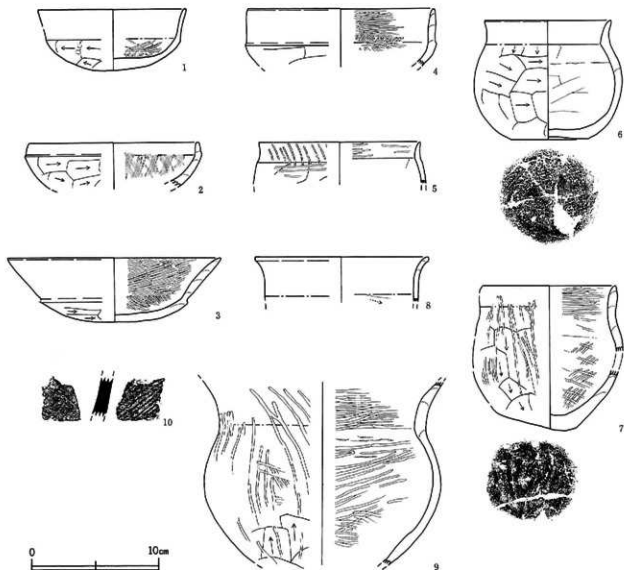
1. 暗褐色土 0002/3 11-A段 0~5mm 100%, 11-A段 5~40mm 100%, 障り跡。
2. 暗褐色土 0002/3 11-A段 0~5mm 100%, 11-A段 5~20mm 100%, 障り跡。

S-2 カマド

1. 灰褐色土 0000/2 粘土粒・塊 0~20mm 100%, 炭化物 0~5mm 10%, 障り跡。
2. 赤褐色土 0000/1 11-A段 0~5mm 100%, 11-A段 5~20mm 100%, 粘土粒 0~3mm 10%, 障り跡。
3. 灰褐色土 0000/2 粘土(厚材), 障り跡。
4. 赤褐色土 0000/4 灰褐色土 0000/2 障り跡。



第6図 SI-2・カマド・PT-4



第7図 SI-2 出土遺物

壁は残存高 25 ~ 30 cm でほぼ直立し、調査区北壁における掘り込みの確認面は、基本土層第Ⅲ層（ローム漸移層）である。壁溝は幅 25 ~ 30 cm、深さ 7 ~ 11 cm で南側にのみ確認された。

床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地され、全体に堅く締まっていた。

柱穴は PT- 1 ~ 3 が主柱穴、PT- 4 が貯蔵穴と判断され、北東の主柱穴は調査区外のため確認できなかった。主柱穴は径が 20 ~ 30 cm と堅穴の規模に比べて小振りであったが、深さが 50 ~ 60 cm でしっかり据えられていた。また、北西の PT- 3 から北に向かって、一条の間仕切溝が設けられていた。貯蔵穴は 100 × 70 cm の長方形で深さ 66 cm であった。

床下面の調査においては小穴 2 基 (PT- 5・6) を確認し、それらを繋ぐように一条の間仕切溝が西壁へと延びていた。

カマドは東壁の中央やや南寄りを僅かに切り込み、大部分が堅穴内に白色粘土で築かれていたと思われるが、廃絶時の意図的な破壊により原形を留めておらず、この為焚口部の補強材と考えられる石材が左右それぞれカマド脇の東壁に接して認められた。しかし、何故か自然石の支脚のみが、原位に直立したままの状態で見つかった。

埋積土は7層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物(第7図、第3表、図版6)

遺物は完形の土師器小型甕(6)の他、土師器坏(1~4)、鉢(5・7)、甕(8・9)、須恵器甕(10)などが出土したが、いずれも半完形以下や小片が多い。

SI-3

遺構(第8図、図版4A~C)

調査区中央のB1・2グリットに所在し、南側が調査区外へと延びる。東約6mにSI-4、すぐ北にSI-2が隣接する。上層を近代の溝に切られている。

平面形・規模は前記の状況から明確にはし難いが、東西長3.5m、現存南北長2.7mとなり東西にやや長い長方形か一辺3.5m程の方形と思われる。北壁の中央やや東寄りにカマドが設けられ、主軸方位はN-1°-Eを示す。

壁は残存高40~50cmでほぼ直立する。壁溝は確認されなかった。

床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地され、全体に堅く締まっていた。床面下の掘り込みは四隅が顕著で、径140~70cm、深さ8cm程であった。

柱穴・貯蔵穴は確認されなかった。

カマドは北壁の中央やや東寄りを幅40cm、奥行30cmの半円形に掘り込み、白色粘土で築かれていたと思われるが、廃絶時の意図的な破壊により原形を留めていなかった。

埋積土は4層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物(第8図、第4表、図版7)

遺物は土師器坏(1~5)、甕(7)、須恵器坏(6)などが出土したが、いずれも半完形以下か小片である。

SI-4

遺構(第9図、図版4D~H)

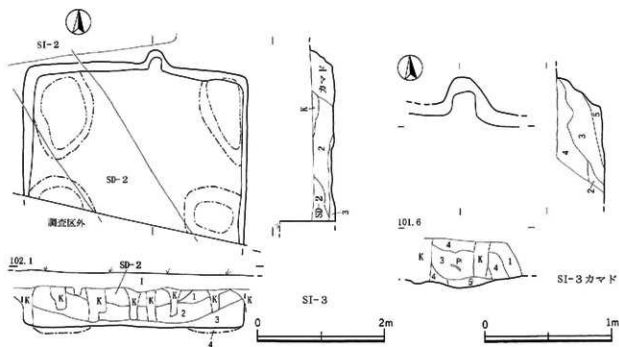
調査区南東のC1グリットに所在し、南側は調査区外に延びる。西約6mにはSI-3が隣接する。重複関係はない。

平面形・規模は前記の状況から明確にはし難い。東西長3.9m、現存南北長2.2mで、本来は一辺3.9m程の方形かあるいは東西にやや長い長方形であったと推察される。北壁の中央やや東寄りにカマドが設けられ、主軸方位はN-2°-Wを示す。

壁は残存高52~70cmでほぼ直立し、調査区南壁における掘り込みの確認面は基本土層第II層(黒褐色土層)である。壁溝は確認されなかった。

床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地され、堅く締まっていた。

小穴は1基(PT-1)のみを整穴のほぼ中央と推察される位置で確認したが、位置及び埋積土や深さなどから主柱穴とは考え難い。貯蔵穴は確認されなかった。

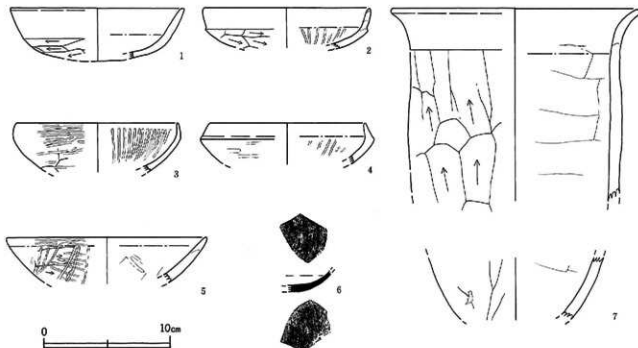


SI-3

1. 黒褐色土 (0.05%) 砂・土粒 0～5mm 10%, 砂・土塊 0～10mm 10%, 埴土の跡。
2. 褐色土 (0.05%) 砂・土粒 0～5mm 10%, 砂・土塊 0～20mm 10%, 埴土の跡。
3. 黒褐色土 (0.05%) 砂・土粒 0～5mm 10%, 砂・土塊 0～10mm 10%, 埴土の跡。
4. 褐色土 (0.05%) 砂・土粒 0～5mm 10%, 砂・土塊 0～30mm 20%, 埴土の跡。

SI-3カマド

1. 厚褐色土 (0.05%) 砂・土粒 0～5mm 10%, 砂・土塊 0～10mm 10%, 埴土の跡。
2. 褐色土 (0.05%) 砂・土粒 0～5mm 10%, 埴土粒 0～5mm 10%, 埴土の跡。
3. 黒褐色土 (0.05%) 砂・土粒 0～5mm / 埴土粒 0～3mm 10%, 埴土の跡。
4. 灰褐色土 (0.05%) 砂・土粒・土塊 0～10mm 10%, 埴土の跡。
5. 黒褐色土 (0.05%) 埴土粒 0～3mm / 炭化物粒 0～2mm 10%, 埴土の跡。



第8図 SI-3・出土遺物・カマド

床下面の調査において、カマド部分を除いて圍繞していたと思われる幅 18～30 cm、深さ 3～5 cm の旧壁溝が確認された。それにより東側においては幅 50 cm 程の建て替え拡張の存在が推察される。

カマドは北壁の中央やや東寄りを幅 80 cm、奥行 40 cm の半円形に掘り込み、白色粘土で築かれていたが、廃絶時の破壊によるものか遺存状態が悪く、袖部の一部が認められたのみで支脚も遺存しなかった。また、建て替え前のカマドもこのやや南寄り（内側）にあったと推定される。

埋積土は 7 層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物（第 9 図、第 5 表、図版 7）

遺物はカマドから半円形の土師器坏（1）、甕（5・6）の他、小片で土師器坏（2）が出土している。また、埋積土中より畿内産と思われる須恵器蓋（3）、坏（4）なども出土しているが、須恵器蓋は時代的に先行するものであり、埋没途中の流入と考えられる。

SI- 5

遺構（第 10 図、図版 5A・B）

調査区北西の A2 グリットに所在し、北側は調査区外に延びる。南西約 2 m に SI- 1 が隣接し、遺構のほぼ中央の小穴 P- 5、SD- 1 が切っている。

平面形・規模は前記の状況から明確にはし難い。東西長 3.5 m、現存南北長 2.5 m で、一辺 3.5 m 程の方形ないし東西に長い長方形であったと推察される。

カマドは確認できず、現存する南壁から推察される主軸方位は N-12°-E を示す。

壁は残存高 5～20 cm でほぼ直立する。壁溝は確認されなかった。

床面はローム層を整地して使用しており、貼床の痕跡は認められなかった。

柱穴は PT- 1・2 が主柱穴、PT- 3 が貯蔵穴と判断される。主柱穴は径 20～25 cm、深さ 50 cm。貯蔵穴は 60×45 cm の歪な長方形で深さ 50 cm。埋積土中からは土師器坏・甕の小片が出土し、白色粘土塊の混入が見られた。

埋積土は 2 層で僅かな堆積しか確認できなかったが、自然埋没と考えられる。

遺物（第 10 図、第 6 表、図版 7）

遺物は埋積土中より土師器坏（3）、甕（4・5）、PT- 3 埋積土中より土師器坏（1・2）、甕（6）などが出土した。

第 2 節 その他の遺構

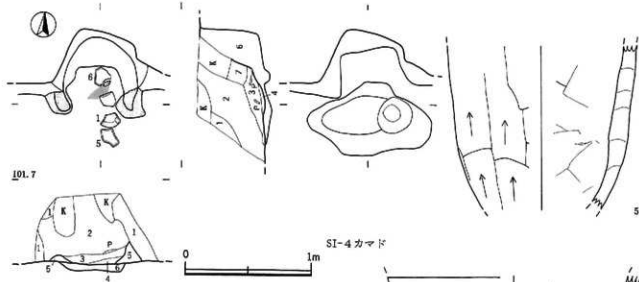
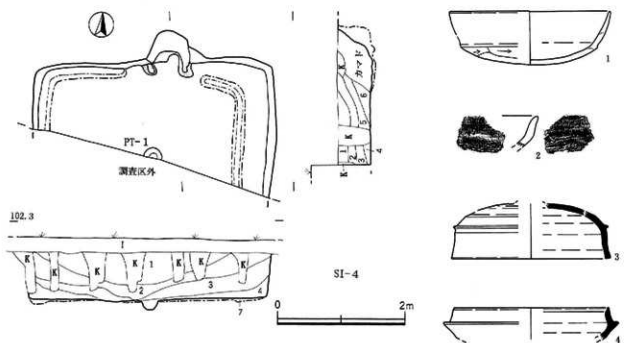
(1) 土坑

調査区内において計 4 基確認したが、遺物の出土もなく明確な時期、性格は判然としなない。なお、SK- 2・3 については埋積土と形状から耕作痕と判断し、調査対象から除外した。

SK- 1

遺構（第 12 図、図版 5F）

調査区北西の A2 グリットに所在し、西側は調査区外へと続く。東約 1.5 m に SI- 5、南約 2 m に SI- 1 が隣接する。また、開口部が近代の耕作痕に切られていた。



SI-4

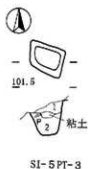
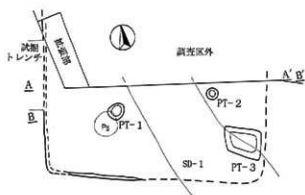
1. 黒褐色土 0002/2 ロ-ム段・溝口～90mm147%, 薪炭片跡。
2. 赤褐色土 0002/1 ロ-ム段口～5mm147%, ロ-ム残片～20mm200%, 粘土段口～3mm1%, 薪炭片跡。
3. 灰褐色土 0003/2 ロ-ム段口～5mm207%, 粘土段口～5mm27%, 粘土段口～3mm1%, 薪炭片跡。
4. 黒褐色土 0002/2 ロ-ム段口～5mm229%, ロ-ム残片～30mm39%, 粘土段口～5mm1%, 薪炭片跡。
5. 暗褐色土 0002/3 ロ-ム段口～5mm200%, 粘土段口～20mm147%, 薪炭片跡。
6. 暗褐色土 0002/3 ロ-ム段口～5mm200%, 粘土段口～5mm27%, 粘土段口～3mm1%, 薪炭片跡。
7. 暗褐色土 0002/2 ロ-ム段口～5mm209%, ロ-ム残片～20mm207%, 薪炭片跡。

SI-4カマド

1. 黒褐色土 0002/2 ロ-ム段口～5mm200%, 粘土段口～4mm17%, 薪炭片跡。
2. 黒褐色土 0002/2 粘土段・溝口～30mm200%, ロ-ム段口～5mm39%, 炭化樹皮口～3mm1%, 薪炭片跡。
3. 黒褐色土 0002/2 ロ-ム段口～5mm27%, 粘土段口～5mm1%, 薪炭片跡。
4. 暗褐色土 0002/3 粘土・粘土段口～5mm200%, 薪炭片跡。
5. 赤褐色土 0002/3 ロ-ム段口～5mm39%, 粘土段口～5mm1%, 薪炭片跡。
6. 黒褐色土 0002/2 ロ-ム段口～5mm200%, 薪炭片跡。
7. 黒褐色土 0002/2 粘土段・溝口～30mm1、粘土段口～5mm200%, ロ-ム段口～5mm39%, 炭化樹皮口～3mm1%, 薪炭片跡。

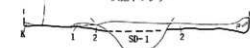


第9図 SI-4・出土遺物・カマド

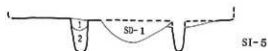


A 102.3 A'

試掘トレンチ



B



SI-5



S-5

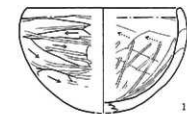
1. 暗褐色土 0008V9 ローム径 0 ~ 5mm 10%, 細砂 9%
2. 黒土 0002D コーア径 0 ~ 5mm 10%, 粘土径 0 ~ 5mm 10%, 炭化植物 0 ~ 3mm 1%, 細砂 9%

S-5 PF1

1. 黒褐色土 0002D コーア径 0 ~ 5mm 10%, ローム径 0 ~ 5mm 1%, 細砂 9%
2. 暗褐色土 0002D コーア径 0 ~ 5mm 10%, ローム径 0 ~ 20mm 3%, 細砂 9%

S-5 PF3

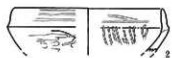
1. 黒褐色土 0002D コーア径 0 ~ 5mm 10%, 粘土径 0 ~ 3mm 1%, 細砂 9%
2. 黒褐色土 0004S コーア径 0 ~ 20mm 10%, 粘土径 0 ~ 5mm 10%, 細砂 9%



1



5



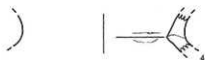
2



3



6



7



第10図 SI-5・出土遺物・PT-3

平面形・規模は前記の状況から明確にし難いが、開口部は現存の東西長 50 cm、現存南北長 145 cm で、本来は径 150 cm 程の円形もしくは楕円形と推定される。深さ 33 cm で壁は直立し、底面はほぼ平坦である。

埋積土は 3 層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土はなかった。

SK- 4

遺構 (第 12 図、図版 5F)

調査区南西の A2 グリットに所在し、南側は調査区外へと続く。東約 1.2 m に SI- 1 が隣接する。一部が近代の耕作痕に切られている。

平面形・規模は前記の状況により明確にはし難いが、開口部は現存の東西長 110 cm、現存南北長 46 cm で、本来は径 110 cm 前後の円形もしくは楕円形と推定される。深さ 35 cm で壁は直立し、底面はほぼ平坦であった。

埋積土は 2 層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土はなかった。

(2) 溝跡

調査区内において 3 条の溝跡を確認し、それらは全て南北溝であったが、SD- 1 を除く 2 条はいずれも埋積土、深さ、断面形状などから近代以降の溝と判断され調査対象から除外した。

SD- 1

遺構 (第 11 図、図版 5C・D)

調査区の中程を南北に延び、A2～B2 グリットに跨がって所在する。SI- 2・5 を切る。南・北両端は調査区外に延び、調査区内にこれに連なる溝はなかった。中軸線の方位は N- 31° - W を示す。

上幅は 130～160 cm、深さ 46～55 cm、壁は大きく外傾し、底面は幅 25～65 cm で断面が逆台形。

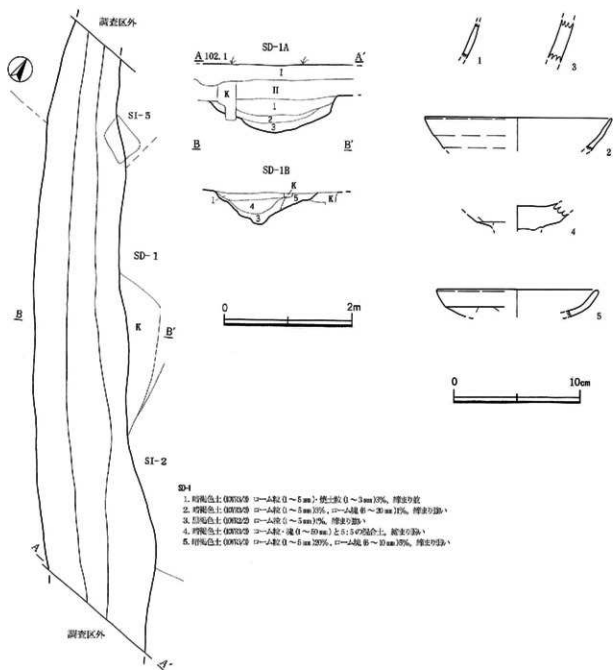
埋積土は 5 層に分けられ基本的には自然埋没だが、一部に埋没途中で投げ込まれたと思われるローム粒・塊が混入していた。

遺物 (第 11 図、第 7 表、図版 7)

遺物は埋積土中より天目茶碗 (1)、船載青磁碗 (2)、拓器甕類 (3) の他、土師器高坏 (4)、土師質土器皿 (5) などが出土したが、いずれも小片である。古代・中世の遺物が出土しているものの、いずれも小片であり、中世以降の溝との判断に留まる。

(3) 小穴

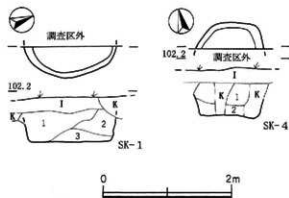
調査区内より小穴を 23 基確認した。これらは調査区の西端付近である A2 グリットと、東端近辺の C1・2 グリットに集中する傾向が見られた。径 15 × 15 cm の P-14 が最小、径 55 × 47 cm の P-21 を最大とし、径 25～30 cm の円形を主体とする。深さは 10 cm の P-14 が最も浅く、64 cm の P-4 が最も深い。また、建物等の構造物として捉えられたものはなく、遺物が出土したのは P-1 と P-21 のみである。埋積土の状況から、古代の所産と推定される。



SD-1

1. 暗褐色土 (0003) 器口—A径 0 ~ 5 cm、径土径 0 ~ 3 cm 10%、押まり跡。
2. 暗褐色土 (0003) 器口—A径 0 ~ 5 cm 10%、器口—A径 6 ~ 20 cm 10%、押まり跡。
3. 暗褐色土 (0002) 器口—A径 0 ~ 5 cm 10%、押まり跡。
4. 暗褐色土 (0003) 器口—A径 (径 0 ~ 10 cm) 土 5 : 5 の割合上、跡あり跡。
5. 暗褐色土 (0003) 器口—A径 0 ~ 5 cm 10%、器口—A径 6 ~ 10 cm 10%、押まり跡。

第 11 図 SD-1・出土遺物



SK-1

1. 黒色土 (00020) コーミング 0~5mm 20%, コーミング 6~20mm 30%, 粘り強い
2. 黒褐色土 (00020) コーミング 0~5mm 20%, コーミング 6~20mm 30%, 粘り強い
3. 黒褐色土 (00020) コーミング 0~5mm 20%, コーミング 6~20mm 30%, 粘り強い

SK-4

1. 黒褐色土 (00020) コーミング 0~5mm 20%, コーミング 6~20mm 30%, 粘り強い
2. 黒褐色土 (00020) コーミング 0~5mm 20%, コーミング 6~20mm 30%, 粘り強い

第12図 SK-1・SK-4

第2表 SI-1 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存数

No.	類別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存数	形状・特徴等	胎土・焼成、色調	備考				
1-1	土師器 杯	口径 12.5 器高 8.2 底径 —	95%	内・外面口辺部横ナデ、外面体・底部へラ削り後横方向のミガキ、内面放射状のミガキ	胎土 焼成 色調 明赤褐色 5YR5/6	No.1 底部外面に黒斑				
1-2	土師器 杯	口径 (12.0) 器高 [3.7] 底径 —	口辺へ体部片	口辺部横ナデ後外面のみ縦方向のミガキ、外面体部へラ削り後多方向のミガキ、内面放射状のミガキ	胎土 焼成 色調 明赤褐色 2.5YR5/6	埋蔵土 1区 体部外面に黒斑				
1-3	土師器 杯	口径 (13.0) 器高 [4.0] 底径 —	口辺へ体部片	口辺部横ナデ後外面のみ縦方向のミガキ、外面体部へラ削り後多方向のミガキ、内面放射状のミガキ、ウレシ処理	胎土 焼成 色調 明赤褐色 5YR4/4	埋蔵土 2区 二次被熱により体部のウレシ処理消失				
1-4	土師器 碗	口径 (14.2) 器高 [5.8] 底径 —	口辺へ体部片	内・外面口辺部横ナデ後縦方向のミガキ、外面体部斜め方向のミガキ、下方のみ斜め方向のクシ目、内面放射状のミガキ	胎土 焼成 色調 超砂・白色粒 普通 (外面) 明赤褐色 2.5YR5/8 (内面) 褐色 7.5YR4/3	埋蔵土 1区				
1-5	土師器 碗	口径 (12.8) 器高 [3.7] 底径 —	口辺へ体部片	内・外面横方向のミガキ	胎土 焼成 色調 白色粒 良好 赤褐色 5YR4/6	埋蔵土 2区				
1-6	土師器 鉢	口径 (12.8) 器高 [5.9] 底径 —	口辺へ体部片	外面口辺部斜め方向のミガキ、内面横ナデ、外面体部へラ削り、内面横方向のヘラナデ後二方向のミガキ	胎土 焼成 色調 白色粒、角閃石 普通 赤褐色 5YR4/8	埋蔵土 2区 二次被熱により器面荒れる、煤付着				
1-7	土師器 高杯	口径 — 器高 [1.6] 底径 (14.0)	脚部片	内・外面横ナデ後外面のみ二方向のミガキ	胎土 焼成 色調 超砂、角閃石 普通 (外面) 赤褐色 5YR4/6 (内面) 明赤褐色 5YR5/6	埋蔵土 1区 二次被熱により煤付着				
1-8	土師器 高杯	口径 — 器高 [3.6] 底径 —	脚部片	内・外面横ナデ後外面のみ縦方向のミガキ	胎土 焼成 色調 超砂、炭粉、角閃石 普通 明赤褐色 2.5YR5/6	No.4				
1-9	土師器 甕	口径 (15.0) 器高 [4.5] 底径 —	口辺部片	内・外面横ナデ、外面に粘土塗合痕	胎土 焼成 色調 超砂粒 普通 (外面) 赤褐色 2.5YR4/8 (内面) 明赤褐色 2.5YR5/6	埋蔵土 2区				
1-10	土師器 甕	口径 — 器高 [2.4] 底径 (6.8)	底部片	外面体・底部へラ削り、内面へラナデ	胎土 焼成 色調 超砂粒 普通 (外面) 明褐色 7.5YR5/6 (内面) 明赤褐色 10YR5/4	埋蔵土 2区				
1-11	灰土器 器台	口径 — 器高 [5.0] 底径 —	口辺部片	外面縦方向 2条の溝線で区画し、その下に9条1單の指痕状文	胎土 焼成 色調 白色粒 良好 (外面) 灰色 N4/0 (内面) 灰色 5Y6/1	No.2 口縁と内面に自然釉				
1-12	須恵器 甕	口径 — 器高 [1.7] 底径 —	体部片	外面タタキ痕、内面舞文当具痕、ヘラナデ	胎土 焼成 色調 黒色粒 良好 灰色 5Y5/1 (内面) 灰色 N5/0	埋蔵土 2区 外面自然釉				
No.	類別 器種	縦径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	厚さ (μ)	石質	特徴	出土位置	備考
1-13	石製機軸芯 勾玉	1.5	34	18	5	5.8	滑石片岩	副磨痕を残したまま表面を研磨	SI-1 PT-1	

第3表 SI-2 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器類	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	備考
2-1	土師器 杯	口径 (12.0) 器高 4.9 底径 —	70%	内・外面口辺部傾ナデ、外面体・底部ヘラ削り、内面多方向のミガキ、ウルシ処理	粘土 焼成 色調 粗砂・白色粒、雲母、角閃石 普通 (外面) 黒色 N2/0 (内面) 灰黄褐色 10YR4/2	No.3, 埋蔵土3区 二次被熱によりウルシ 処理消失
2-2	土師器 杯	口径 (13.4) 器高 [3.6] 底径 —	30%	内・外面口辺部傾ナデ、外面体・底部ヘラ削り、内面二方向のミガキ、ウルシ処理	粘土 焼成 色調 粗砂、角閃石 普通 黒色 10YR1/1	No.2, 埋蔵土3区
2-3	土師器 杯	口径 (17.0) 器高 5.1 底径 —	60%	外面口辺部傾ナデ、内面傾め方向のミガキ、外面体・底部ヘラ削り、内面二方向のミガキ、ウルシ処理	粘土 焼成 色調 粗砂、石英 普通 (外面) 赤褐色 5YR5/6 (内面) 黒色 N2/0	埋蔵土1・3・4区 掘方4区、カマド
2-4	土師器 杯	口径 (15.0) 器高 [4.6] 底径 —	—	外面口辺部傾ナデ、内面傾め方向のミガキ、外面体部ヘラ削り、内面多方向のミガキ、黒色処理	粘土 焼成 色調 粗砂・白色粒、雲母 普通 (外面) ぶい褐色 7.5YR5/4 (内面) 黒色 N2/0	埋蔵土1区
2-5	土師器 小型鉢	口径 (13.0) 器高 [3.3] 底径 —	—	内・外面口辺部傾ナデ後外面に斜め方向、内面に横方向のミガキ、外面体部ヘラ削り後横方向のミガキ、内面ヘラナデ	粘土 焼成 色調 粗砂・白色粒 普通 明赤褐色 2.5YR5/8	埋蔵土2区 外面に黒斑
2-6	土師器 小型甕	口径 10.2 器高 9.5 底径 6.0	完形	内・外面口辺部傾ナデ、外面体・底部ヘラ削り、内面ヘラナデ	粘土 焼成 色調 粗砂 やや甘い にぶい赤褐色 10YR6/3	No.1
2-7	土師器 小型鉢	口径 (10.6) 器高 11.5 底径 5.8	60%	内・外面口辺部傾ナデ後内面のみ横方向のミガキ、外面体部ヘラ削り後横方向のミガキ、内面傾め方向のヘラナデ後二方向のミガキ、外面底部ヘラ削り後多方向のミガキ、内面ヘラナデ後多方向のミガキ	粘土 焼成 色調 粗砂 普通 にぶい赤褐色 5YR4/4	No.3, 埋蔵土3区
2-8	土師器 甕	口径 (14.0) 器高 [3.6] 底径 —	—	内・外面口辺部傾ナデ	粘土 焼成 色調 細砂粒、雲母、石英 やや甘い にぶい黄褐色 10YR6/4	カマド隣方
2-9	土師器 甕	口径 — 器高 [14.7] 底径 —	30%	内・外面口辺部傾ナデ後内面のみ横方向のミガキ、外面体部ヘラ削り後多方向のミガキ、内面ヘラナデ後傾め方向のミガキ、内外面に粘土接合痕	粘土 焼成 色調 粗砂 普通 (外面) 赤褐色 5YR4/6 (内面) 灰褐色 7.5YR4/2	No.3, 埋蔵土3区、カマド 二次被熱により煤付若
2-10	粗面器 甕	口径 — 器高 [3.0] 底径 —	—	体部片 外面平行タタキ、内面無文当具痕	粘土 焼成 色調 白色粒 普通 (外面) 暗灰色 N3/0 (内面) 灰色 N4/0	埋蔵土1区

第4表 SI-3 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器類	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	備考
3-1	土師器 杯	口径 (14.0) 器高 (4.2) 底径 —	—	内・外面口辺部傾ナデ、外面体・底部ヘラ削り、内面ウルシ処理	粘土 焼成 色調 粗砂・白色粒 普通 (外面) にぶい褐色 5YR6/4 (内面) 黒褐色 5YR2/1	埋蔵土1・2区 二次被熱により内面の ウルシが薄くなり、器 面荒れる
3-2	土師器 杯	口径 (13.4) 器高 [3.2] 底径 —	—	内・外面口辺部傾ナデ、外面体部ヘラ削り、内面放射状のミガキ、ウルシ処理	粘土 焼成 色調 粗砂 やや甘い (外面) にぶい黄褐色 10YR6/4 (内面) にぶい赤褐色 5YR5/4	埋蔵土2区 二次被熱により内面の ウルシほぼ消失
3-3	土師器 杯	口径 (13.0) 器高 [4.0] 底径 —	—	外面口辺部傾め方向のミガキ、外面体部ヘラ削り後横方向のミガキ、内面放射状のミガキ	粘土 焼成 色調 粗砂・白色粒 良好 明赤褐色 2.5YR5/8	埋蔵土1区
3-4	土師器 杯	口径 (12.4) 器高 [3.3] 底径 —	—	内・外面口辺部傾ナデ、外面体部ヘラ削り後横方向のミガキ、内面放射状のミガキ	粘土 焼成 色調 粗砂・白色粒、石英 普通 (外面) 赤褐色 2.5YR4/8 (内面) 赤褐色 5YR5/6	埋蔵土2区
3-5	土師器 杯	口径 (16.0) 器高 [3.6] 底径 —	—	内・外面口辺部傾ナデ後外面のみ横方向のミガキ、外面体部ヘラ削り後横方向のミガキ、内面体部ヘラナデ後傾め方向のミガキ	粘土 焼成 色調 粗砂粒、雲母、石英 良好 (外面) 赤褐色 5YR4/8 (内面) 褐色 7.5YR6/6	埋蔵土1区 外面に黒斑
3-6	粗面器 杯	口径 — 器高 [1.7] 底径 —	—	体部片 口コ整形、外面体部1/3部ヘラ削り	粘土 焼成 色調 粗砂・白色粒 良好 灰色 7.5Y5/1	埋蔵土1区
3-7	土師器 甕	口径 (20.0) 器高 (25.0) 底径 —	40%	内・外面口辺部傾ナデ、外面体部縦方向のヘラ削り、内面傾め方向のヘラナデ	粘土 焼成 色調 粗砂粒、雲母 普通 褐色 5YR6/6	埋蔵土1区、カマド 二次被熱により煤付若

第5表 SI-4 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	類別 器種	大きさ (cm) 口径・高さ・底径	遺存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	備考
4-1	土師器 杯	口径 (13.0) 器高 4.2 底径 —	70%	内・外面口辺部横ナデ、外面体・底部へラ削り、内面体・底部ナデ	胎土 焼成 普通 色調 にぶい褐色 5YR8/4	カマドNo.3 二次焼熱により煤付 着、器面荒れる
4-2	土師器 杯	口径 器高 [2.8] 底径 —	口辺部片	内・外面口辺部横ナデ後横方向のミガキ、 外面体部へラ削り後横方向のミガキ	胎土 焼成 普通 色調 白色粒 良好 色調	埴土1区
4-3	須恵器 蓋	口径 (13.0) 器高 [4.4] 底径 —	口辺へ甲部	コタロ型形、外面甲部へラ削り後ツマミ を付ける	胎土 焼成 普通 色調 白色粒 良好 色調 (外面) 褐色 N2/0 (内面) 灰色 M4/0	埴土2区
4-4	須恵器 杯	口径 (12.4) 器高 [2.5] 底径 —	口辺へ体部片	コタロ型形	胎土 焼成 普通 色調 白色粒 良好 灰色 M4/0	埴土1区、カマド 外面体部に自然軸
4-5	土師器 甕	口径 器高 [13.1] 底径 —	体部片	外面縦方向のへラ削り、内面へラナデ、 粘土接合痕	胎土 焼成 普通 色調 粗砂粒、雲母、石英、角閃石 普通 赤褐色 5YR5/2	埴土2区、カマドNo.4 二次焼熱により煤付着
4-6	土師器 甕	口径 器高 [16.3] 底径 —	体部片	外面縦方向のへラ削り、内面縦方向の へラナデ	胎土 焼成 普通 色調 粗砂粒、石英、角閃石 普通 赤褐色 5YR4/6 (外面) 赤褐色 5YR4/6 (内面) にぶい褐色 7.5YR8/4	埴土4区、カマドNo.1 二次焼熱により煤付着

第6表 SI-5 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	類別 器種	大きさ (cm) 口径・高さ・底径	遺存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	備考
5-1	土師器 杯	口径 (12.6) 器高 [8.4] 底径 —	40%	内・外面口辺部横ナデ、外面体部へラ削り 後横方向のミガキ、内面へラナデ後斜 削状のミガキ、ワルシ底組	胎土 焼成 普通 色調 粗砂、白色粒、角閃石 普通 色調 (外面) 褐色 7.5YR4/6 (内面) 褐色 N2/0	P3 埴土1区、刺方
5-2	土師器 杯	口径 (12.0) 器高 [3.8] 底径 —	口辺へ体部片	内・外面口辺部横ナデ後横方向のミガキ、 外面体部へラ削り後横方向のミガキ、内 面縦方向のミガキ	胎土 焼成 普通 色調 粗砂粒、石英 普通 褐色 7.5YR6/5	P3 埴土
5-3	土師器 杯	口径 (14.0) 器高 [2.5] 底径 —	口辺へ体部片	内・外面口辺部横ナデ後横方向のミガキ、 外面体部へラ削り、内面一方のミガキ	胎土 焼成 普通 色調 白色粒、石英 やや甘い 褐色 N2/0	埴土
5-4	土師器 甕	口径 器高 [4.2] 底径 —	口辺部片	内・外面横ナデ	胎土 焼成 普通 色調 粗砂、白色粒、雲母 やや甘い 色調 (外面) にぶい褐色 7.5YR3/4 (内面) 暗褐色 7.5YR3/3	埴土
5-5	土師器 甕	口径 — 器高 [7.7] 底径 7.0	体へ底部片	外面体部へラ削り後ミガキ、内面へラナ デ、外面底部へラ削り	胎土 焼成 普通 色調 粗砂粒 普通 色調 (外面) 暗褐色 5YR3/4 (内面) 黒褐色 7.5YR2/1	埴土 二次焼熱により煤付 着、器面荒れる
5-6	土師器 甕	口径 — 器高 [3.5] 底径 (6.0)	体へ底部片	外面体部へラ削り後高め方向のミガキ、 底部へラ削り、内面へラナデ後ミガキ	胎土 焼成 普通 色調 粗砂粒 普通 色調 (外面) にぶい褐色 7.5YR5/4 (内面) 黒褐色 10YR2/2	P3 埴土

第7表 溝跡出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	類別 器種	大きさ (cm) 口径・高さ・底径	遺存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	備考
D1-1	陶器 天目茶碗	口径 — 器高 [2.9] 底径 —	体部片	コタロ型形	胎土 焼成 良好 色調 粗粒 褐色 N2/0、赤褐色 5YR4/8	南信埴土、瀬戸・美 濃系
D1-2	陶器 青磁碗	口径 (18.0) 器高 [2.6] 底径 —	口辺へ体部片	コタロ型形 内面に二重沈線と支線の一 部の描線、外面無文、軸は非常に厚く真 入も無い	胎土 焼成 普通 色調 粗粒 良好 色調 灰オリーブ 5Y6/2	北信埴土、中野福屋 産、12 C後半
D1-3	陶器 高坪	口径 — 器高 [3.2] 底径 —	体部片	輪範み	胎土 焼成 良好 色調 白色粒、石英 良好 色調 (外面) 褐色 7.5YR4/4 (内面) にぶい黄褐色 10YR6/3	北信埴土信濃系、15 -16 C
D1-4	土師器 高坪	口径 — 器高 [2.2] 底径 —	体部片	外面へラ削り	胎土 焼成 普通 色調 粗砂、白色粒、石英 やや甘い 赤褐色 5YR4/8	南信埴土
D1-5	土師器土器 皿	口径 (13.0) 器高 [2.2] 底径 —	口辺部片	内・外面口辺部横ナデ、外面体部へラ削り	胎土 焼成 普通 色調 粗砂、白色粒 普通 色調 にぶい黄褐色 10YR7/3	北信埴土 内面に煤付着

第5章 総括

第1節 遺構・遺物について

今次調査区は約 229 m²という小規模なものであったが、調査の結果計 5 軒の竪穴住居跡を確認した。各遺構及び遺物の特徴を略記し、総括とする。

調査区が住宅地の道路幅という制約から住居跡の全体を調査し得たものは無かった。したがって規模・形状は明確にし難いが、SI-2 は一辺 6.4 m の方形と推定され、規模を推定し得たものでは最大である。SI-3 は東西長 3.5 m、SI-4 は同 3.9 m、SI-5 は同 3.5 m であった。なお、SI-1 は北東隅のみの確認であるが、2 度の建て替え拡張を行っており、SI-2 と同規模かそれを上回る可能性も否めない。カマドは 3 軒に認められ、SI-2 は東壁、他は北壁に設けられていた。住居廃絶に伴う破壊によるものか遺存状態が悪い。SI-2 は河原石の支脚が原位置に据えられたままであったが、焚口部の補強材と見られる石材が移動されカマド脇の壁に立てかけてあった。他の 2 軒は支脚も遺存しない。貯蔵穴は SI-2・5 にあり、ともに南東隅に設けられていた。SI-5 の貯蔵穴は埋積土中に粘土塊が認められ、土師器坏が 2 片出土した。柱穴は SI-1・2・5 に見られ、いずれも 4 本柱である。SI-1 は柱穴の配置や壁溝・間仕切溝の状況から 2 度の建て替え拡張が想定された。SI-4 は床面下より壁溝が確認され、東辺が 0.4 m 拡張されていた。南北長 3.9 m とすると 1.6 m²程の拡張である。SI-2 は南辺に壁溝、北西部に間仕切溝が見られたが、床面下の南西部にも認められた。

各住居跡とも遺物の出土量が少なく、土師器を主体とするが、SI-1・4 からは所謂古式の須恵器が出土した。SI-1 では当初の床面（建て替えは床を嵩上げ）より 5 世紀中葉頃の土師器とともに須恵器の器台受部や壺体部片が出土。1 度目の建て替え時の柱穴底面より石製祭具＝勾玉形が 1 点出土し、5 世紀中葉後半から後葉前半の所産と判断された（第 2 節参照）。柱穴底面より出土していることから、建築時における祭祀の跡と考えられる。さらに、2 度目の建て替え拡張に伴う東壁際より 6 世紀前葉の土師器坏が出土している。したがって、この住居は 5 世紀中葉より 6 世紀前葉にかけて使用されたと思われる。また、SI-4 の埋積土より 5 世紀後葉と見られる須恵器有蓋高坏の蓋や、6 世紀前半代の須恵器坏身が出土した。住居跡の時期とは隔たりがあり、他所より流入したと考えられるが、付近にこれらを保有する者がいたことを示す。

また、本遺跡の北方約 500 m の雷電山遺跡では平面形が長方形という該期としては特異な形状の住居跡群が調査され、多数の石製模造品や 5 世紀後葉の須恵器が出土している。さらに、北東方約 500 m の関道遺跡では 5 世紀末～8 世紀前半の集落が調査され、表土中ではあるが須恵器器台の脚部片が出土した。このように、本遺跡の周辺には古墳時代中期以降の集落跡が多数所在する。

田川左岸の東谷・中島地区は長期間にわたる膨大な面積の調査で成果が上げられている。これによれば、弥生時代から古墳時代前期までの遺構の分布は希薄であるが、中期になると爆発的な増加を見せ当地の開発の進捗を示す。該期の集落跡としては権現山遺跡、百目鬼遺跡、杉村遺跡、立野遺跡、砂田遺跡などが知られる。権現山遺跡では 5 世紀中葉に集落の形成が始まり、5 世紀後葉には豪族居館と見られる施設が登場する。立野遺跡では竪穴住居跡群の中に貯蔵穴群が設けられていた。砂田遺跡では石製模造品の工房跡、権現山遺跡（杉村遺跡 1 区）では鍛冶工房跡なども確認されている。これらに隣接する東谷古墳群の主墳は県指定史跡塚塚古墳である。5 世紀前半では、県内最大級の全長約 105 m の 2 重周溝をもつ前方後円墳である。なお、この古墳はこれまでの水系毎の単位から水系を超えた広域的支配を示すと考えられている。

この後、5 世紀中葉になると西方約 4.7 m、田川右岸に県指定史跡の塚山古墳群が形成され、勢力圏が移動

したと考えられている。塚山古墳は全長約98mの前方後円墳で、笹塚古墳の後継的存在と見られる。次に全長63mの塚山西古墳、さらに全長58mの塚山南古墳が5世紀末葉に築かれた後は、勢力の中心が宇都宮南部より県南地域へと移行する。この塚山古墳群の周辺には若松原遺跡や北若松原遺跡などの同時期と考えられる集落跡が所在する。若松原遺跡や北若松原遺跡では多数の石製模造品が採集されており、その中には半成品が多く見られることから白玉の工房跡の存在が推定されている。同じ田川右岸に所在する本遺跡や前記の雷電山遺跡、関道遺跡も塚山古墳群より2～2.5km程の距離にあり、これを支えた集落の一つと考えられる。

本遺跡の周辺には、本遺跡のように古墳時代から奈良・平安時代へと継続する集落跡（10ヶ所）と、奈良・平安に至って登場する遺跡（9ヶ所）がほぼ同数見られ、律令期に入って新たな集落が多数形成されたことが判る。田川低地の開発を目的とした所謂「計画村落」の類であろうか。

なお、今次調査区では南北溝SD-1の埴積土より12世紀後半代の舶載青磁と15～16世紀の拓器・陶器小片が出土したが、溝の性格は定かでは無い。北東方約500mの関道遺跡でも、溝より土師質土器（内耳土器）が出土している。北方約500mの雷電山遺跡は江曾島城跡と呼ばれる中世城館跡であり、それに関連するものであろうか。

第2節 石製祭具 勾玉形 (SI-1 PT-1)

篠原祐一（祭祀考古学会）

不純物の少ない白色の滑石と緑色岩との接触による黒色化した滑石片岩の片直面を材とする月形を呈する勾玉の形代である。石材は三波川帯の所産によるもので、硬度は滑石部分が1、滑石片岩部分が2である。

母岩から得た荒削り工程品(剥片)を厚さ4mmの長方形扁平板状に研磨し、腹部を浅く抉ることで勾玉状となす。表裏面とも長軸に一方の粗い研ぎ出しで平滑面を整形する。背面は六分割して横から斜め方向の研磨を施し成形するが、砥石目は表裏面と同じ荒砥で、一部に荒削り時の剥離面を残す。

腹部は、板状長軸方向の中央に鑄が残るよう斜めに鉄製利器で削り仕上げる。削りは完成時の尾部から頭部方向に一回で、頭部に削り残り部分を設けることで頭部に嘴状の突起を残す。両面の研磨は平滑であるため、穿孔に伴う掘え方面の選択は同等であるが、当該品は平面形で幅があり、所謂腰の重みを持つ方を尾部とし、比較的高位に穿孔位置を設定する。

穿孔は片面穿孔直接貫通法を用い穿孔剥離が認められる。紐擦れなどの痕跡が無く一回性の使用と見られる。当該遺物は、腹部の浅い抉りと、腰の重い三日月状の形態、および研磨砥の粗さと背面の研磨方向と分割回数、また、背面に荒削り時の剥離を残す仕上げなどの状況を勘案し、当該地域の勾玉形使用の時期を考慮すると、五世紀中葉後半から後葉前半（一世紀五分法）に製作されたものと考えられる。また、石材に滑石を含む状況が、中期前半までに生産された青緑色系滑石片岩の産出地域や産出岩帯から、鬼石地域の滑石を多く含有する岩帯に移動した時期の所産と見られ、量産期に移行する産出地の岩石状況を示すことも、製作時期を支持する証左となろう。

なお、下毛野地域の製作遺跡は小山南部の西仁連川周辺が主体で有り、消費地は宇都宮南部地域が中心である。これまでの遺跡間流通の状況では、製作地・消費地に隔絶した時間幅は設けられていない状況にあり、製作時期と消費時期を近接した時期と捉えることが一般的傾向である。



A. 調査区全景 (東より)



B. 調査区西半部全景 (南より)



A. 調査前全景（北東より）



B. SI-1 南北土層（東より）



C. SI-1 完掘（南より）



D. SI-1 掘方 東西土層（南より）



E. SI-1 出土遺物（西より）



F. SI-2 南北土層（東より）



G. SI-2 完掘（南より）



H. SI-2 焼土範囲（東より）



A. SI-2 掘方 (南より)



B. SI-2 貯蔵穴 南北土層 (西より)



C. SI-2 貯蔵穴完掘 (西より)



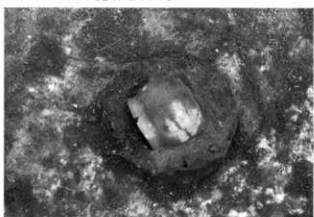
D. SI-2 カマド東西土層 (南より)



E. SI-2 カマド完掘 (西より)



F. SI-2 カマド掘方 (西より)



G. SI-2 出土遺物 (西より)



H. SI-2 出土遺物 (西より)



A. SI-3 南北土層 (東より)



B. SI-3 完掘 (南より)



C. SI-3 カマド完掘 (南より)



D. SI-4 東西土層 (北より)



E. SI-4 南北土層 (東より)



F. SI-4 完掘 (東より)



G. SI-4 カマド 南北土層 (東より)



H. SI-4 カマド完掘 (南より)



A. SI-5 完掘 (南より)



B. SI-5 貯蔵穴 東西土層 (南西より)



C. SD-1 土層B (北より)



D. SD-1 完掘 (南より)



E. SK-1 南北土層 (東より)



F. SK-4 完掘 東西土層 (北より)



G. P17 完掘 (東より)



H. 基本土層 東西断面 (北より)



SI-1(1)



SI-1(2)



SI-1(4)



SI-1(6)



SI-1(8)



SI-1(11)



SI-1(12)



SI-1(13)

SI-1(13)



SI-2(1)



SI-2(2)



SI-2(3)



SI-2(4)



SI-2(5)



SI-2(7)



SI-2(8)



SI-2(9)



SI-3～5、漢跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こしめせき							
書名	おしめ尽遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第94集							
編著者名	前原義之・柏崎広伸・水野順敏・篠原祐一							
編集機関	株式会社 日本竊業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112				TEL 0287-93-0711			
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5				TEL 028-632-2764			
発行年月日	西暦 2016(平成 28)年 1月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おしめ尽遺跡	宇都宮市江曾島町 105 番 1、107 番 2	9201	3227	36° 31′ 23″	139° 52′ 10″	20150713) 20150808	229 ㎡	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おしめ尽遺跡	集落跡	・古墳～奈良時代 ・中世	・竪穴住居跡 5軒 ・土坑 2基 ・小穴 23基 ・溝跡 一条	・土師器, 須恵器, 石製 模造品(祭具)		・5世紀中葉～6 世紀前葉にわたる 建て替えの見られ る住居跡の柱穴底 面より石製模造品 が出土。		
要約	・5世紀中葉より7世紀末～8世紀前葉にかけての集落遺跡で、全体的に遺物は少ないものの、古式須恵器が散見された。柱穴底面より石製模造品が出土し、住居の建築(建て替え拡張)に際しての祭祀の跡と推察される。							

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第94集

おしめ尽遺跡

発行年月日 2016(平成 28)年 1月 31日
 編 集 株式会社 日本竊業史研究所
 〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112
 TEL 0287-93-0711
 発 行 宇都宮市教育委員会文化課
 〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5
 TEL 028-632-2764
 印 刷 下野印刷 株式会社
 〒320-0061 栃木県宇都宮市宝木町 1-28-11
 TEL 028-622-6953